



文化財で見る松島の歴史

文化財の調査・研究③ オルソフォト

古来より「をじまが磯」という歌枕として京の都まで聞こえ、奥の高野とまで表現された霊場雄島。この島には鎌倉時代から供養のための石碑が数多く建てられ、江戸時代の地理学者である長久保赤水が記した『東奥紀行』には樹間にシラサギが群れているようだと言われています。

その中でも最も大きいものが「頼賢碑」。高さは3.35m、石巻の稲井石を加工して作られています。

上段には大日如来を表す梵字（ア）と「奥州御島妙覚庵」「頼賢庵主行實銘並序」という文字が、下段には18行643字で徳治2年（1307）に弟子30余人が師である頼賢を讃えるために建立したことが記されています。雄島には見仏上人という伝説的な修行僧がおり、鳥羽天皇や北条政子など各時代の権力者から深い帰依を受けていたと伝えられています。その再来として称えられていたのが、円福寺（瑞巖寺の前身）より妙覚庵主に任命された頼賢だったのです。頼賢碑の双龍の陽刻や唐草・雷文の縁取りは中国風の見事なもので、刻まれた文は、元から来日し鎌倉建長寺10世となった一山一寧という名僧が揮毫したことでもその価値を高め、昭和30年に国の重要文化財に指定されています。

鎌倉時代から江戸時代の雄島を描いた絵図には頼賢碑が露出



0.85cm

（学芸員・森田）

して描かれています。明治時代に県営松島公園として整備が進められる中で、碑の覆堂が建設されました。いま頼賢碑を訪れても普段は施錠がされており、内部をうかがうことが難しい状況です。

そこで左の画像をご覧ください。これは中世考古学研究者である田中則和氏が作成したものを提供いただいたもので、オルソフォトという、数多くの写真を合成し、ゆがみを直したものです。暗い室内をのぞいても分からない、碑の全体像がイメージできます。

この機会に石碑に着目しながら雄島を散策してみてください。

Appalachian Air ⑭ 2月の日数

Appalachian Mountains（アパラチア山脈）は、カナダとアメリカ合衆国の東北部に延びる大きな山脈です。昨年7月にアパラチア山脈のあるアメリカ合衆国・ノースカロライナ州からやって来た Stefan 国際交流員のコラムです。



Almost three thousand years ago the ancient Romans used a calendar that only had 10 months. It started with the spring equinox. The calendar was used by farmers to plan for planting and harvesting, so the winter months weren't considered very important. It was after this that an old king matched up the calendar with the year's twelve lunar cycles and added January and February.

January is named after the Roman god of beginnings and February is named after a purification ceremony held on the full moon of the same month.

In ancient Rome even numbers were considered unlucky, so to reach the 355 days that the 12 lunar cycles take one month had to have an even number of days. He decided to make February, the last month of the year, have an even number of days.

With 355 days in a year eventually the seasons will fall out of sync. To fix this, there was an occasional leap month added by priest-politicians; however, they would insert it whenever they wanted to elongate the terms of members of their own factions.

It was about two thousand years ago when Julius Caesar aligned the calendar with the earth's rotations around the sun and adjusted the number of days in each month. He decided to add one day to February during leap years instead of adding an entire month.

約3千年前、古代ローマ人は10か月しかないカレンダーを使っていました。そのカレンダーは春分の日から始まっていました。種まきや収穫の時期を知るために農家が使っていたので、冬の月は重要ではなかったからです。その後、昔の王様がカレンダーを1年間の12か月周期に合わせて、1月を意味する January や、2月を意味する February を追加しました。

January という言葉は、始まりのローマ神に由来し、February という言葉は2月の満月に行われる禊に由来します。

古代ローマでは、偶数は縁起が悪いとされていたため、カレンダーの日数は12か月周期で355日間にするために、ひと月の日数は奇数にする必要があります。暦年の最終月である February の日数を奇数にしました。

結局355日間の暦年は、季節とずれてしまいます。そのため、僧侶兼任の政治家に閏月が追加されましたが、自分の派閥の政治家の任期が延長されるように、カレンダーの好きなところに加えていました。

約2千年前、ユリウス・カエサルはカレンダーを地球の公転に合わせ、各月の日数を調整しました。そして彼は、閏月のかわりに、閏年の2月を1日延長することにしました。